

＜文学分野の参照基準＞策定の際のいくつかの論点

柴田 翔

- 1) 既にしばしば言及されてきたように、＜文学＞は、他の分野の教育の対象領域とは様々な面で様相を異にするので、＜文学分野の参照基準＞は教育学モデルにはこだわる必要はない、あるいはむしろ、こだわらないほうが望ましい。
- 2) ＜参照基準＞を参照すべき大学・学部・学科はさまざまな条件の下に置かれていることを考えれば、＜文学分野の参照基準＞が、同分野での教育内容の、いわば＜総カタログ的性格＞を持つこともある程度は避けられないと思われるが、逆に、そうであればこそ、＜参照基準＞策定の際の論理的重点は、むしろ、「いかなる大学・学部・学科においても、＜文学分野の教育＞に関しては、これだけのことには留意することが望ましい」という、＜最低限の共通基準＞（換言すれば＜原理的＞な共通基準）の提示に置かれるべきだと思われる。
- 3) その＜原理的基準＞について、私案として、1、2の例を示せば：
  - a) 文学作品がテキストの一行一行（一段落一段落）の集積によって成立していることを考えれば、その一行一行（一段落一段落）を正確に読み取る訓練、＜テキスト精読演習＞が（外国語文学・古典文学のみならず自国語文学・現代文学においても）重視されることが望ましい。  
（文学史、思潮史、社会史など、作品の周辺・背後事情の概説的授業のみで終わらぬように配慮すべきである）
  - b) ＜文学分野の教育＞が最終的には＜ことばについての教育＞であるべきことを考えれば、そのいわば仕上げとして、卒業論文（あるいは長文レポート）を必須とすることが望ましい。  
但し、＜参照基準＞策定が学部教育のためのものであり、また大学・学部・学科の状況がさまざまであることを考えれば、この「卒業論文（あるいは長文レポート）」は、例えば研究史概観などの＜学問的体裁＞を持つ必要はまったくなく、むしろ自分が向かい合ったテキストについて自分が考えたことを、できるだけ正確な言葉で記す＜感想文＞であってよい。
- 4) 文学教育の出発点が、学習者がテキストを一行一行読むことにあること、しかしまた同時に、上記でも述べたように、大学・学部・学科の状況がさまざまであることをも考え合わせれば、必ずしも常に従来の＜原語・原典主義＞にこだわることなく、状況に応じて＜和訳・現代語訳テキストの活用＞も考慮されて（あるいは許容されて）よいこと（＜精読演習＞のテキストも含む）――。  
上記の趣旨をどう考えるか（場合によってはそれを＜参照基準＞へ何らかの形で書き込むべきか否か）についても、本分科会で検討する必要があると思われる。

以上